

清朝錢について

On Ch'ing Dynasty Coins

知念 隆博

CHINEN Takahiro

ABSTRACT: It is known that the Ch'ing-dynasty coins have been excavated in mainland sites of the Edo period, when the country was under the so-called edicts of seclusion. On the other hand, coins from the Ch'ing-dynasty hardly appeared in the Ryukyu Kingdom which remained open to trade. The majority of coins found in Okinawa are either of the Northern Sung dynasty or the so-called Kan-ei Tsuho of Edo period. This paper attempts to survey the Ch'ing-dynasty coins found in the Okinawa Islands and to compare the distribution of Ch'ing coins with that of the Kan-ei Tsuho. The results demonstrate that, in the Edo period, Ryukyu had closer relations to Japan than to China.

1. はじめに

沖縄県内より出土する錢貨は、北宋錢が最も多く、元朝錢、明朝錢は少ない、清朝錢はさらに少なく、1遺跡で複数枚出土するのは稀である。本土では江戸時代の鎖国体制下において清朝錢が検出されることで、注目されているが、沖縄県においては琉球王国という鎖国体制下ではなく、清朝と交易を行える状況にあったにも関わらず出土枚数は少ない。そこで今回は清朝錢を出土する遺跡を紹介し、出土枚数の少ないこと及び同時期の錢貨である寛永通寶との関わりを若干考えたい。なお、報告書等では、全ての錢貨の拓影を載せることは不可能な場合が多いので、今回の出土遺跡数および枚数は最小の数字と考えている。

2. 出土遺跡

清朝錢を出土する遺跡を表1に記す。それによると10遺跡で清朝錢を出土している。清朝錢は初鑄年1662年の康熙通寶、1736年の乾隆通寶、1796年の嘉慶通寶、1821年の道光通寶の4種が確認されており、清朝錢以外には寛永通寶が目立ち、初鑄年1636年の古寛永、1668年の文錢、1697年の新寛永などが確認されている。以下に各遺跡について略述する。

(1) 漢名那ウェヌアタイ遺跡 (知名定順・金城利枝 編1990)

宜野座村字漢那の石灰岩丘陵に立地する、11・12世紀～17・18世紀の遺跡で、全盛期は出土する陶磁器より13～15世紀と考えられている。遺構は住居址、鍛冶工房跡等が確認されている。出土した清朝錢は乾隆通寶の完形品1点であり、その他の錢貨は無文錢がある。

(2) 城間古墓群 (松川章 編1990)

浦添市字城間の石灰岩の丘陵斜面及び海岸低地に形成されている。確認された古墓は14基で、岩陰囲い込み墓3基、岩陰掘り込み墓5基、掘り込み墓4基、亀甲墓2基である。清朝錢は乾隆通寶が掘り込み墓より1点確認されている。その他の錢貨はない。出土陶磁器は近世のものを主体としている。

表1 清朝銭出土遺跡表

| No. | 遺跡名 | 銭種 | 清朝銭 | | | | 文 献 |
|-----|-------------|----|------|------|------|------|--|
| | | | 康熙通寶 | 乾隆通寶 | 嘉慶通寶 | 道光通寶 | |
| 1 | 漢那ウェーヌアタイ遺跡 | | | ○ | | | 知名定順・金城利枝 編1990 |
| 2 | 城間古墓群 | | | ○ | | | 松川章 編1990 |
| 3 | 湧田古窯跡 | | | ○ | ○ | ○ | 大城慧 ほか1993, 島袋洋 編1995・1999 |
| 4 | 識名シーマ御嶽遺跡 | | | ○ | | | 島弘 編1997 |
| 5 | 銘苅古墓群 | | | ○ | | ○ | 金武正紀 編1998・1999, 仲宗根啓 編2001 |
| 6 | ナーチャー毛古墓群 | | | ○ | | | 金武正紀 編2000 |
| 7 | 首里城跡 | | | ○ | ○ | ○ | 上原静 編1995, 大城慧 ほか1998, 新垣力 編2002, 盛本勲 編2002, 西銘章 編2001, 当真嗣一・上原静 編1988 |
| 8 | 天界寺 | ○ | | | | | 島弘 編1999・2000, 島袋洋 編2001・2002 |
| 9 | 円覚寺 | | | ○ | | ○ | 山本正昭 編2002 |
| 10 | 阿波根古島遺跡 | | | | | ○ | 金城亀信 ほか・編1990 |

(3) 湧田古窯跡 (大城慧 ほか1993, 島袋洋 編1995・1999)

那覇市泉崎の丘陵縁辺部に立地する琉球王府の中心的窯業地であった。17世紀初期に開窯されたとされ、1682年の壺屋へ窯場が統合されると、次第に衰退していったと考えられている。遺構は窯跡、石積、瓦列遺構、瓦敷遺構、井戸、溝状遺構、ピット等が検出されている。清朝銭は乾隆通寶1点、嘉慶通寶1点、道光通寶1点得られており、その他の銭貨は北宋銭、明朝銭、寛永通寶、無文銭等が得られている。

また、注目される資料として、無文銭が集中して出土しており、2～13枚まとまっているものが6資料確認されている。

(4) 識名シーマ御嶽遺跡 (島弘 編1997)

那覇市字真地の石灰岩台地に所在するグスク時代～近世の遺跡である。検出された遺構は土留め状遺構、集石遺構、ピット等がある。清朝銭は乾隆通寶が1点確認されているが、攪乱層からの出土である。その他の銭貨として寛永通寶が1点ある。

(5) 銘苅古墓群 (金武正紀 編1998・1999, 仲宗根啓 編2001)

那覇市字銘苅に所在する石灰岩に形成された古墓群である。囲込岩陰墓、掘込墓、破風墓、平葺墓、亀甲墓等が約290基確認されている。清朝銭は乾隆通寶が2点、道光通寶が1点確認されており、両銭貨とも寛永通寶と出土している。当遺跡において特徴的な傾向として、銭種が少なく、主体を成しているのは寛永通寶であることを挙げることができる。また、絵銭と考えられる資料も1点確認されている。

(6) ナーチャー毛古墓群 (金武正紀 編2000)

那覇市字天久と安謝の境の石灰岩丘陵の斜面に形成された古墓群である。確認された古墓は60基で掘込み墓が54基、亀甲墓が6基である。清朝銭は乾隆通寶が1点得られている。その他銭貨として、熙寧元寶、淳熙元寶、洪武通寶が各1点検出され、寛永通寶が98点得られている。墓の覆土より検出されているものは注目される。

(7) 首里城跡 (上原静 編1995, 大城慧 ほか1998, 新垣力 編2002, 盛本勲 編2002, 西銘章 編2001, 当真嗣一・上原静 編1988, 山本正昭 編2003)

那覇市首里当蔵町3丁目に所在する、琉球王府の中心となっていたグスクである。その築城年代については明確ではないが、尚巴志王代(1422~1439年)には構造が確立していたと考えられている。発掘調査は継続して行われているが、首里城より出土する清朝銭は、乾隆通寶、嘉慶通寶、道光通寶であり、他の遺跡と同様に数点確認されているだけであり、北宋銭に比べると非常に少量となっている。

(8) 天界寺跡 (島弘 編1999・2000, 島袋洋 編2001・2002)

那覇市首里金城町に所在し、石灰岩台地に立地する。首里城の西方に、第一尚氏の菩提寺として1450~1456年の間に創建されたと伝えられ、明治末頃廃寺となる。検出された遺構は、基壇、参道、石列、円弧状遺構、石垣、石積、石囲い遺構、ピット等がある。清朝銭は康熙通寶の1点得られている。その他の銭貨としては、首里城と同様に北宋銭の銭種が多く、寛永通寶、琉球銭、無文銭も確認されている。

(9) 円覚寺跡 (山本正昭 編2002)

那覇市首里当蔵町に所在し、石灰岩台地に立地する。第二尚氏の菩提寺として、首里城の北方に隣接して1492年に創建されたと伝えられている。昭和初期には国宝に指定されたが、去る沖縄戦において焼失した。

清朝銭は乾隆通寶1点、道光通寶1点得られている。その他の銭貨は北宋銭、明朝銭、寛永通寶、無文銭等が得られている。

(10) 阿波根古島遺跡 (金城亀信 ほか・編1990)

糸満市字阿波根に位置し、泥岩の風化土斜面上に立地する。東南の丘陵上に阿波根グスクが隣接している。検出された遺構は集石群、長形状石敷、石列がある。清朝銭は道光通寶が攪乱層より1点得られている。その他の銭貨は中国銭が太平通寶、宣和通寶、洪武通寶の3点あり、寛永通寶が9点、無文銭が4点得られている。

出土遺跡より窺うことができるのは、清朝銭の大部分は首里城周辺を中心とした南部地域からの出土であり、北部地域では漢那ウェヌアタイ遺跡、中部地域では城間古墓群だけである。また、首里城周辺にしても、まとまって出土することはなく、各遺跡、遺構で1~2枚が確認されるだけである。一方で、銘苅古墓群等にみえるように、寛永通寶は複数枚確認されている遺跡がほとんどである。

4. 清朝銭と寛永通寶

清朝銭は23枚確認されているが、寛永通寶は少なくとも486枚あり、両者の枚数にはかなりの開きが

ある。その理由の一つとしては、1609年に薩摩によって琉球が侵攻されたことをあげることができる。

1609年以後は『中山伝言録』及び『琉球国志略』において、日常的に寛永通寶が使用されていたことが窺えるため、経済においても江戸のシステムに組み込まれることになり、寛永通寶が通貨としても主になったのではないか。

また、首里城周辺において清朝銭及び寛永通寶が多く出土しているという事実は、調査頻度の影響もあると考えるが、銭貨による物品の売買が行われていたのが首里を中心としていたことを表している可能性がある。

4. おわりに

清朝銭及び寛永通寶等の出土する遺跡とそれより推測されることについて若干記述したが、最後に今回の抽出作業において気付いたことと課題を記したい。

首里城跡の報告書を調べると、清朝銭が数点は記載されているので、当初は沖縄県内より出土する清朝銭は、他の都道府県に比べて、多いと考えていた。しかし、実際に集計すると、出土する遺跡及び枚数も非常に少なく、本土と大差はない。一方で寛永通寶の出土数が多く、銭貨を出土する遺跡では、大部分の遺跡において確認されている。そのようなことから、沖縄県内より出土する銭貨は北宋銭が最も多く、次いで寛永通寶、明朝銭と続くと考えられる。

沖縄本島以外の地域をみると、清朝銭について記載されている遺跡はなかった。しかし、沖縄本島よりも距離的に中国に近いと、何らかのかたちで導入されていたと考えられる。

今後の課題としては、無文銭、清朝銭及び寛永通寶の関係である。県内の御嶽、古墓などで確認されている無文銭は清朝銭及び寛永通寶と同時期であるため、何らかの相関関係があると考えている。

本土の中世～近世にかけての墓には副葬品として、概ね6枚の銭貨を死者に持たせる六道銭という習慣があった（鈴木公雄1999）。寛永通寶が多いということは、この六道銭というものが沖縄県内においても存在した可能性がある。1つは石川市の伊波仲門門中墓（座間味政光・大田宏好 編1987）であり、報告書によると墓室入口の寛永通寶6枚は、石の下より出土しているということである。2つめは、具志川市のジョーミーチャー墓（照屋孝 編2003）であり、ここでは墓室内の厨子甕内に銭種は不明だが、6枚の銭貨があることがわかっている。また、6枚と限定できない資料でも、銘苅古墓群等の古墓より銭貨が出土する例が増加していることから、今後、墓より出土している資料を集成する必要があると考えている。

（ちねん たかひろ：調査課 専門員）

参考・引用文献

新垣力（編）2002『首里城跡－継世門周辺地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第9集
沖縄県立埋蔵文化財センター

上原静（編）1995『首里城跡 南殿・北殿跡の遺構調査報告』沖縄県文化財調査報告書第120集 沖縄県教育委員会
大城慧 ほか1993『湧田古窯跡（I）－県庁舎行政棟建設に係る発掘調査－』沖縄県文化財調査報告書第111集 沖縄県教育委員会

大城慧 ほか1998『首里城跡－御庭跡・奉神門跡の遺構調査報告－』沖縄県文化財調査報告書第133集 沖縄県教育委員会

片桐千亜紀（編）2003『首里城跡－右掖門及び周辺地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書

第14集 沖縄県立埋蔵文化財センター

岸本美緒1999「清代中国の経世論における貨幣と社会」『越境する貨幣』歴史学研究会（編）青木書店

金城亀信 ほか1990『阿波根古島遺跡－那覇・糸満線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告－』沖縄県文化財調査報告書第96集 沖縄県教育委員会

金武正紀（編）1998『銘苅古墓群（Ⅰ）－那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅴ－』那覇市文化財調査報告書第39集 那覇市教育委員会

金武正紀（編）1999『銘苅古墓群（Ⅱ）－那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅵ－』那覇市文化財調査報告書第40集 那覇市教育委員会

金武正紀（編）2000『ナーチャー毛古墓群－那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅶ－』那覇市文化財調査報告書第44集 那覇市教育委員会

小畑弘己2003「出土清朝銭研究の地平－清銭と寛永通寶－」『出土銭貨』第18号 出土銭貨研究会

座間味政光・大田宏好（編）1987『古我地原内古墓－沖縄自動車道（石川～那覇間）建設工事に伴う緊急発掘調査報告書（7）－』沖縄県文化財調査報告書第85集 沖縄県教育委員会

島弘（編）1997『識名シーマ御嶽遺跡－真地配水池建設事業に伴う緊急発掘調査報告－』『那覇市文化財調査報告書』第34集 那覇市教育委員会

島弘（編）1999『天界寺跡－首里城線街路工事に伴う緊急発掘調査報告－』那覇市文化財調査報告書第42集 那覇市教育委員会

島弘（編）2000『天界寺跡－首里城公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告－』那覇市文化財調査報告書第43集 那覇市教育委員会

島袋洋（編）1995『湧田古窯跡（Ⅱ）－県庁舎議会棟建設に係る発掘調査－』沖縄県文化財調査報告書第121集 沖縄県教育委員会

島袋洋（編）1999『湧田古窯跡（Ⅳ）－県民広場地下駐車場建設に係る発掘調査－』沖縄県文化財調査報告書第136集 沖縄県教育委員会

島袋洋（編）2001『天界寺跡（Ⅰ）－首里杜館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第2集 沖縄県立埋蔵文化財センター

島袋洋（編）2002『天界寺跡（Ⅱ）－首里城公園管理棟新設工事に伴う緊急発掘調査－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第8集 沖縄県立埋蔵文化財センター

鈴木公雄 1999『出土銭貨の研究』東京大学出版会

知名定順・金城利枝1990『漢那ウエーヌアタイ遺跡－近隣緑地公園建設に伴う発掘調査報告書－』宜野座村乃文化財9 宜野座村教育委員会

照屋孝（編）2003『具志川市の文化財第5集－ジョー（門）ミーチャー墓調査概報－』具志川市教育委員会

当真嗣一・上原静（編）1988『首里城跡 欽会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査』沖縄県教育委員会

永井久美男1998『近世の出土銭貨Ⅱ－分類図版篇－』兵庫埋蔵銭調査会

仲宗根啓（編）2001『銘苅古墓群（Ⅲ）－那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅷ－』那覇市文化財調査報告書第50集 那覇市教育委員会

西銘章（編）2001『首里城跡－下之御庭・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第3集 沖縄県立埋蔵文化財センター

東野治之1997『貨幣の日本史』朝日選書574 朝日新聞社

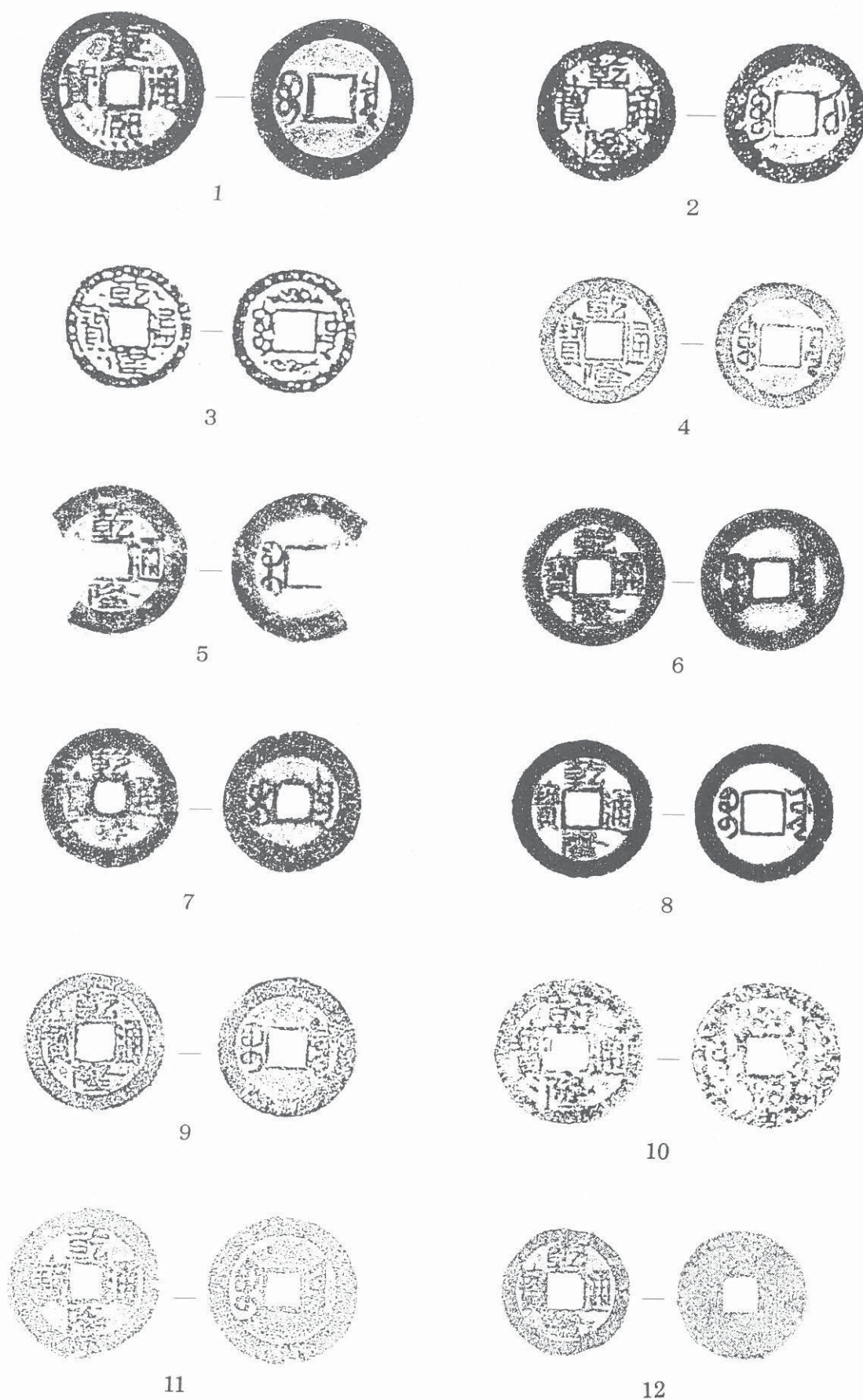
松川章（編）1990『城間古墓群－牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査報告書－』浦添市文化財調査報告書 浦

添市教育委員会

盛本勲（編）2001『首里城跡－管理用道路地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第1集
沖縄県立埋蔵文化財センター

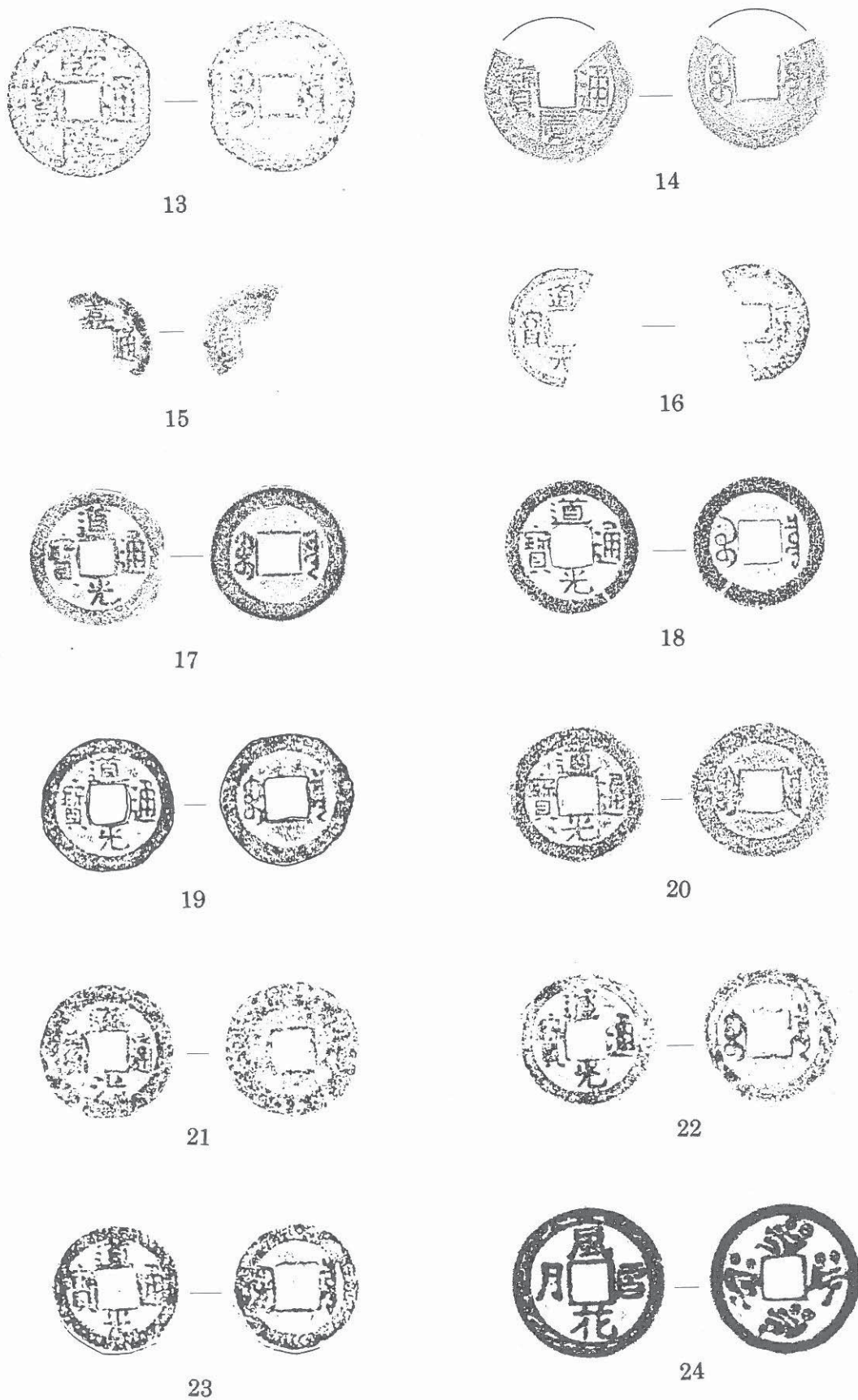
山本正昭（編）2002『円覚寺跡－遺構確認調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第10集 沖縄県立
埋蔵文化財センター

山本正昭（編）2003『綾門大道跡－首里城跡守礼門周辺地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報
告書第13集 沖縄県立埋蔵文化財センター



1 康熙通寶 (天界寺跡)、2～12 乾隆通寶 (2 漢那ウェーヌアタイ遺跡、3 城間古墓群、4 湧田古窯跡、5 識名シーマ御嶽遺跡、6・7 銘苅古墓群、8 ナーチャー毛古墓群、9～12 首里城跡)

図1 出土清朝銭 (S=1:1)



13乾隆通寶（天界寺跡）、14・15嘉慶通寶（14首里城跡、15湧田古窯跡）、16～23道光通寶（16天界寺跡、17湧田古窯跡、18銘苺古墓群、19～21首里城跡、22円覚寺跡、23阿波根古島遺跡）、24繪錢（銘苺古墓群）

図2 出土清朝銭2 (S=1:1)